ハ調の音階による16小節の旋律づくり

～思いや意図をもって表現する子どもを育てるために（３年次／旋律）～

江　田　　司

本研究では，二部形式の楽曲を例に，４小節の旋律の構造を「はじめ（第１～２小節）／なか（第２～３小節）／おわり（第４小節）」と分けて捉えるところから，それぞれの特徴をもとに部分的につくったり結び付けたりする活動を発展させ，各４小節×４段＝１６小節のまとまりのある旋律づくりを行う。反復，変化，対照など，まとまりある旋律を構成している要素に気付きながらつくることで，鑑賞及び表現の活動において，曲のまとまりに気をつけて音楽を味わう態度や楽曲の構造をもとに思いや意図をもって表現する子どもを育てることをめざした。

キーワード：音楽づくり，二部形式の旋律づくり，さまざまな反復，ハ調の音階，思いや意図

１．研究の目的

本研究の目的は，ハ調の音階を使った１６小節の旋律づくりを通して，曲のまとまりに気を付けて音楽を味わったり，表現したりする態度を身に付けることである。

本研究で明らかにしたい内容は，旋律の構造「はじめ／なか／おわり」の中で，「なか」をつくる際に予想される要件を明らかにすることである。なお，これまでの研究において「はじめ」及び「おわり」のつくらせ方は明らかにしているところである。*1

本実践にかかわる留意点は次の通りである。

①学習の過程で，長い積み上げが必要な方法を意図せず，子どもたちのレディネスあるいは教師の力量によってどこからでも始められる旋律づくりをめざすこと。

②創造性が発揮される旋律づくりの過程において，「これができていればよし」という見極めが明確になるような評価の方法や子どもたちが自分たちの作品を吟味できる場を用意すること。

③反復，変化，対照を生かした旋律づくりによって，表現や鑑賞の活動に資する内容（「思いや意図」「味わい」など）を明らかにすること。

旋律創作の一歩手前を確実な評価とともに用意することが本実践の目的であり，子どもたちがつくったものには敢えて「習作（練習作品）」という位置づけを用いる。

２．研究方法

思いや意図をもって主体的に表現できる子どもを育てることをめざして，これまでの研究成果を生かし，表現や鑑賞の活動を通して音楽作品に内在する様々な反復的な要素を比べて捉えさせることから始めた。

２．１．旋律のさまざまな「おわり」方を知る

予め歌詞を抜いた曲『ケムシ・―』（まど　みちお詩／同詩による児童４作品）に歌詞を付ける活動で，楽曲に含まれている「問いと答え」や「反復」，さらに同じ歌詞でもさまざまな表現が可能であることに気付かせる。

次に『ケムシ・―』各曲の第４小節目「きらい」を終止に気を付けて聴き，そのうちの１作品を取り上げて第４小節目をブランクにして，この部分のみつくらせる。どのような気持ちでつくった「きらい」なのか，その小節を聴き比べて，音の動かし方次第でいろいろな気持ちが伝わることを感じ取らせる。すべての子どもにはむずかしい課題と思われるので，ペアやグループ（男女混合４人程度）の活動とする。理解できた段階で徐々に個人の活動へと移行する。

２．２．「静かにねむれ」（フォスター作曲）を用い，４つのフレーズの反復や変化・対照など，音楽の仕組みを捉え今後の学習への見通しをもつとともに「はじめ」をつくる

「静かにねむれ」仕組みの説明については「音楽授業支援ＤＶＤ」*2を活用する。

次に，身近な４曲「ちゅーりっぷ」「ちょうちょう」「ロンドンばし」「ひのまる」を用い，反復（模倣），同型反復，同音反復，フレーズの同型反復などいろいろな反復のかたちを見つけ，旋律のまとまりに反復が大きな役割を果たしていることを理解させる。

ここで旋律づくりに入る。４／４拍子の第１小節目であるが，３番目の音を「ソ」に指定して「はじめ」３拍をできるだけたくさんつくるようにする。十分できた子どもには「ミ」でもつくらせる。

２．３．「おわり」の部分を，「続く」や「終わる」音で選んで２つのフレーズを結びつけ４小節×２＝

８小節の旋律づくりをする

「はじめ」３拍の旋律に２種類の反復を使って「なか」をつくると，結びつきやまとまりができることを理解する。次に旋律線を工夫して「はじめ」から４小節の旋律をつくる。第４小節目の最後の音を「ド」以外にして「続く」感じを出す。　反復を使ってできた「はじめ／なか」２小節の旋律はデジタル用ワークシート*3に書き，自由に閲覧できるようにして学級の仲間と共有できるようにする。

次に，第２フレーズの最初２小節は反復して「終わる」感じを出して８小節の旋律を完成する。

このとき班で相談して１つの作品に集約してもよいとして，つくり方の習得に力点を置く。

２．４．「対照」に気を付けて第３フレーズを考え，第４フレーズを第２フレーズの本復（模倣）として１６小節の旋律を完成させる

つくった旋律を聴き合って，それぞれの旋律線のまとまりや特徴を感じ取るようにする。また，できたところまででよいとして相互に発表することで意欲化を図る。

２．５．できた旋律を聴き合う

作品は教師に必ず見せるようにして「反復」と「終止」がきちんと理解できているかを確認する。また，つくった旋律を紹介し拡大楽譜を見ながらみんなで歌うようにする。階名唱で行う。さらに日頃から歌い親しんでいる曲（愛唱曲）の反復や変化，対照にも注意を向けるようにする。

３．事例

ここでは，平成23年10月～11月に和歌山大学教育学部附属小学校5年生で行った題材「曲のまとまりに気をつけて音楽を味わおう～旋律づくり～」について報告する。

３．１．題材設定の理由

本題材で扱う旋律づくりの対象は，ハ長調の音階による旋律（Ａ＋Ｂ＝aa’ba’）二部形式，４小節×４段＝１６小節である。歌詞は扱わない。なお二部形式には，「全体が２つの部分からなっている楽曲の形式を二部形式という。唱歌形式の１つである。一部形式を除けばもっとも単純な形式であるが，すべての形式の基礎になる形式であって，他のすべての形式は二部形式の変形であるといえる（ウィキペディア）」ように，音楽の構成を感じ取って聴いたり表現したりするための基本的な要素が含まれているところから，この学習によって曲のまとまりに気をつけて音楽を表現したり味わったりする態度や能力を育てたい。なお小学校の段階であるので曲のまとまりを感じ取らせることを主眼として，形式に関する用語「二部形式」は扱わない。

子どもたちはこれまで構成和音をもとに音を選ぶ簡単な旋律づくりや，リコーダーを使った２～５音の簡単な旋律づくりを経験してきている。７音での旋律づくりは初めてである。

ハ調の音階では，階名シ（導音）と階名ファ（準導音）２つの音（ドとミへ解決を導く音）が加わり７音となる。旋律づくりの材料としては比較的容易と考えられる５音の音階「ドレミソラ」に，これら２音が加わることで，音を続けたときに生まれる旋律のなめらかさやおもしろさ，音が次の音を求めていく音そのものの指向性などを感じ取れるのではないかと考える。しかしながら２音が増えることによって旋律づくりは飛躍的に難しくなると予想される。子どもたちの達成感が増すように，いくつかの小さなステップを確認しながら進める学習過程を用意したい。

３．２．主に使用した教材等

◆児童作品『ケムシ・―』４曲（まどみちお詩／和歌山大学教育学部附属小学校５年生児童：平成２１年度卒業生作曲）*4

◆「ちゅーりっぷ」「ちょうちょう」「ロンドンばし」「ひのまる」の反復見つけワークシート*5

◆ベートーヴェン『第九』第４楽章主題（喜びの歌）から同音反復部分を変化させた３種類の旋律比較ワークシート*6

３．３．授業の実際

３．３．１．第１次　「おわり」をつくろう（1時間）

第１次については昨年度の実践と重なるが，子どもたちに提示した学習プリントは７曲から４曲へとスリム化し時間短縮を図った。

これらは，まどみちお「ケムシ・―（タイトル）／さんぱつは　きらい（詩）」に５年生の子どもたちが作曲したものである。旋律を階名で歌って，歌詞を当てはめる問題である。身近な先輩たちの曲であることと親しみやすいユーモラスな詩に子どもたちはすっかり虜になって考える。２曲目までは難なく解けるが，３曲目が分からない。男子２名がつくった曲ときいて，俄然，男子が積極的に考えを巡らせるようになる。やがて冒頭の「ケ，ケムシ，ケムシ～」が見つけだす。

４曲目の最後は「きらい」の３連続と思ったら，落ちが「ケムシ」と分かる。子どもたちはユーモアが大好きだ。ここで，曲には「はじめ・なか・おわり」があって，「おわり」を感じさせる要素が幾つかあることを考えさせた。

○「ド」や「ソ」（主音＝中心になる音）で　終わった感じが出る。（まるで家に帰ったような気分）

○最後に休みが入っている。（その前にも休みが入っているものもある）

○３回同じ音(型)をくり返して終わる感じを出す。
（くり返して終わる）

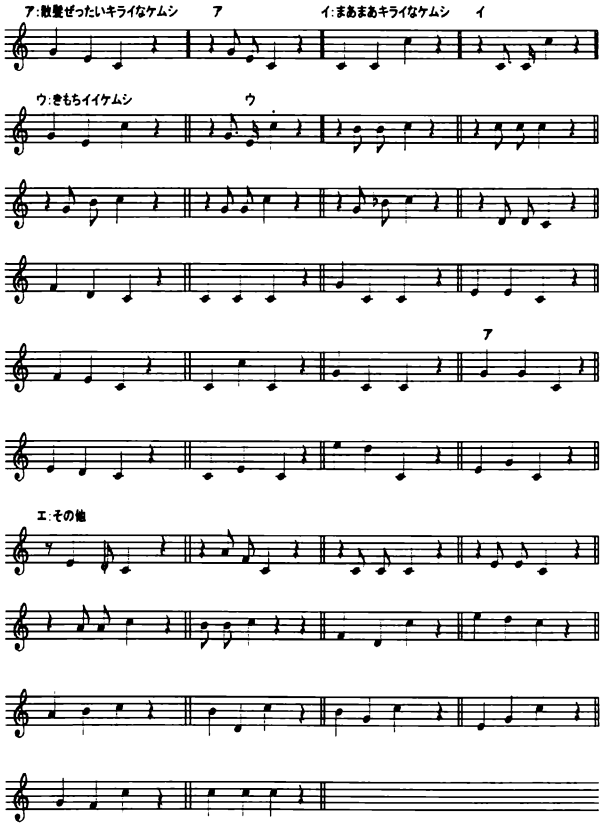
次に第１曲目の最後の小節をブランクにしたものを用意して「おわり」をつくらせた。その際どのようなイメージにするかをもちやすいように，

ア　散髪は，ぜったい「きらい」なケムシ
イ　散髪は，まあまあ「きらい」なケムシ
ウ　散髪は，「きらい」と言いながら，実は「気持ちのいい」ケムシ
エ　その他のケムシ

として考えさせた。もちろん記譜させてみた。つくる音は，わらべうた風に「ラ」も考えられるが，混乱を避けるために，３拍目を上下いずれかの「ド」に限定した。

４拍目は４分休符であるので，実際子どもたちがつくるのは１と２の２拍分だけであるが，全員で３８種類１５０旋律の「おわり」ができた。（下譜例１）

子どもたちが考えた「ケムシ・ー」の最後1小節（終止のかたち）
全部で38種類　歌詞は「キライ」が入ります



【譜例１】

授業後，すべてを楽譜ソフトに打ち込んで，次時冒頭に音を聴かせた。たった２つの音を選ぶだけでもいろんな表現ができることに子どもたちは驚いていた。

３．３．２．第２次　「はじめ」「なか」の仕組みを考えよう（1時間）

３．３．２．１．「音楽授業支援DVD」の活用

新教科書になってから，「音楽授業支援DVD」（製作：スズキ教育ソフトK.K.）が添付されるようになった。１学期の「リボンのおどり」の実践でも活用したが，今回，「音楽のしくみ」の部分を参考にした。子どもたちと一緒に視聴しながら教科書の内容を確かめていくだけだが，動画の効果で理解が進むようである。教材は「静かにねむれ」（フォスター作曲）である。内容的には教科書とまったく同じであるので詳細は避けるが，４小節フレーズ４段の二分形式の曲の構造を，それぞれの段の特徴を捉えながら共通点や違いなどを浮き彫りにしていく。なお，このDVDでの「旋律づくり」（教科書準拠）は扱わなかった。扱っている音符の種類が多いため，指導内容が煩雑になると考えたからである。ここでは，第１作目で使う音符は４分音符のみとして，反復や変化など旋律の構造的な部分の理解を中心に進めた。

３．３．２．２．学習プリント「学習のアイディア１」提示*[5]

「ちゅうりっぷ」（近藤宮子作詞／）井上武士作曲）「ちょうちょう」（作詞者不明／ドイツ民謡）「ロンドンばし」（高田三九三日本語詞／イギリスの遊び歌）「ひのまる」（文部省唱歌／高野辰之作詞　岡野貞一作曲）の４曲を使って，「反復（模倣）」「同型反復」「同音反復」「フレーズの同型反復」について理解を図った。どの子どももよく知っている曲を歌いながら考え感じ取らせたことで，反復の効果への理解が高まった。

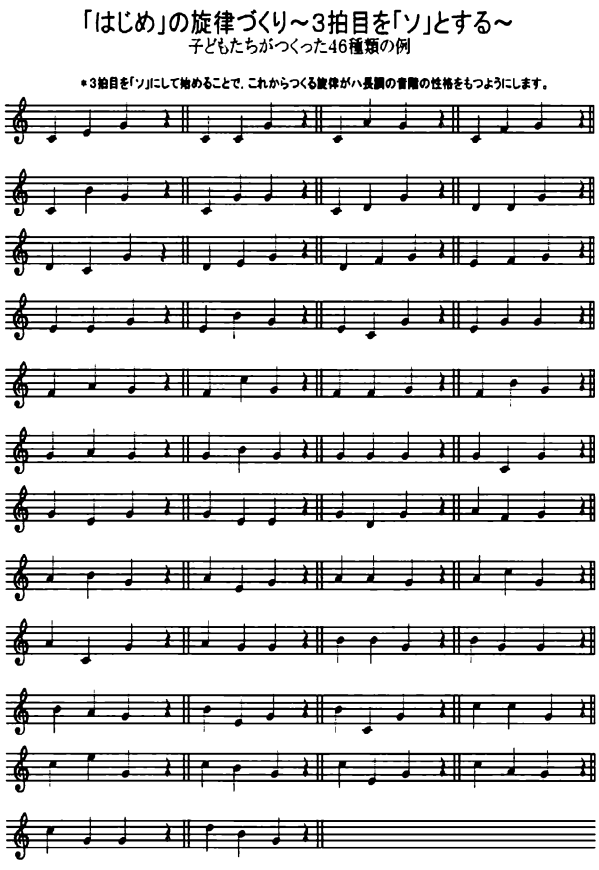
３．３．２．３．同音反復の効果「喜びの歌」*[5]

また，ベートーベンの交響曲第九番，第四楽章の有名な「喜びの歌」の旋律（冒頭部分４小節）を弾いて，「同音反復」が小節と小節を結びつける大きな効果をもたらしていることも紹介した。

ここで，いよいよ旋律づくりに入った。最初の課題は「はじめ」をつくること。やり方は「おわり」をつくるときと似ていて，３番目の音を「ソ」に限定して最初の１，２拍目をつくるというものである。できるだけたくさんつくることを約束して活動に移らせる。また，早くたくさんできてしまった子どもについては，「ミ」にもチャレンジしてよいと伝えた。ここでは４６種類もの「はじめ」が出来上がった。多い子どもで１６旋律，少ない子どもで１旋律である。（譜例２）

３拍目を「ソ」としたのは，これまでの実践からハ長調の音階を使って旋律づくりを求めるに際して，ハ長調Ⅰ度の和音が最初の小節に使えることを狙ったものである。「ドミソ」であるから，当然，「ミ」でもよいわけである。これまで「ド」を使った実践を行ったが，旋律線が最初から高すぎたり低すぎたりするために，反復を使った旋律づくりの実践には必ずしも向かないことが分かってきた。例えば，ト調の感じがする「シラソ・」でも，伴奏和音を「ドミソ」とすることで、最初は音がぶつかっても３拍目で収まる感じが

する。



【譜例２】

３．３．３．第３次　「はじめ・なか・おわり」をつくろう（４時間）

３．３．３．１．「はじめ」から「なか」をつくる（1/4 時間）

つくった「はじめ」から同型反復を使って２小節目をつくり，同音反復で１小節目と２小節目を結びつける。（『小五教育技術』アイディアⅡ，並びに『初等教育資料』参照*5*6）

同型反復で第２小節目を書くことが「難しい」と感じる子どもたちには，まず「反復」させてみることにした。次に，市販のクリアホルダー（レポートや書類を整理するときに使う透明のホルダー，Ａ４100 枚パックで千円以内のもの）を，カッターで４等分して１枚のホルダーから８枚のクリアシートをつくった。これを第１小節目の音符に当てて上から，油性マジックでなぞり，それを第２小節目にずらし，上下させて音型の変化を見るというもの。「音符転写クリアシート」と名付けて活用させた。このシートで友だちの助けを借りないで同型反復を書けるようになった。

できた２小節の旋律を，アノトペン*3を使ってワークシート（デジタル用紙）に記入させた。３年生のときにこのペンを使った子どもが約３分の１いるので，電子黒板の画面を自分たちで操作しながら書き方を確かめたり，拡大して音譜を読んだりしていた。また，男女別出席順に２名ずつ７つの班をつくった（３班だけ５名であとは４名）。協力し合う姿が多く見られた。また，落ち着かない子どもはワークシートを確認すると理解できていない部分があり，個別に指導する機会をもち，子ども同士を結びつける手立てを打った。

３．３．３．２．かたちを考えて「おわり」までつくる（2/4）

前時の続きを行ったが，早く進める子どもも出てきたので，第２次で学習したフレーズの反復と「続く」「終わる」で８小節の旋律ができること，また旋律線には大きく４つの型があることを紹介した。山型，谷型，上行型，下行型の４つであるが，早速，ワークシートにどの型を使ったか記入できている子どもが２人いた。

このように最初２小節の旋律線を見ながら，意図的につくっていこうとする姿勢は，見通しをもってつくる態度へとつながるものである。この態度はぜひすべての子どもたちに広げたい。

また，つくる活動で個人的に精一杯であったため，お互いの旋律をどのように構成しているかについての意思疎通がまだ十分とは言えない状況があった。

３．３．３．３．16 小節の旋律をつくる（3/4，4/4）

第３時間目で２９名中１５名の子どもがすでに８小節の旋律を完成。残りの子どもたちも第２フレーズ最後の２小節を残すのみとなった。

旋律づくりは学習の段階が進むにつれて個人差・個性差が大きく現れてくる。ここで自分がつくったものを，完全ではなくてもできたところまで紹介し合う活動を用意した。班の活動であっても個人的にどんどん進んでいるところにあっては，いろいろな表現が生まれていることを感じ取らせたいと考えたからである。班内で紹介し合う姿で興味深かったのは，子どもたちは自分の楽譜を班のメンバーに回し，一人ずつが仲間の曲をリコーダーや鍵盤ハーモニカで演奏して確認していったのである。自分の作品を演奏して聴いてもらうであろうと予想していた私は，子どもたちが仲間の書いた楽譜を読みながら音にしていこうとする姿には驚かされた。

第３フレーズをつくるに当たって「おわり」を「ド」以外の続く感じすること，またフレーズ全体は，第１／第２フレーズとの対照性を求めた。具体的には，「上行型であれば下行型を」「山型であれば谷型を」といったように，既出の楽曲「静かにねむれ」で再度確認をした。４分音符と４分休符のみを使い，２つの反復を同時に使って曲を始めることを指定した１６小節の旋律づくりであったが，２曲目からはこの指定を外し自由につくらせることにした。ただし，４つのフレーズで第３フレーズは対照性をもつこと，各フレーズの最後は「続く／終わる／続く／終わる」とすることだけは決まりとした。

なお，子どもがつくった作品に対しては，大きなジェスチャーで褒めたり，他の子どもたちに紹介したりして常に創作意欲を高めるようにした。

４．事例の考察

「はじめ」の第３音を「ソ」あるいは「ミ」とすることで，ハ調の主和音「ドミソ」を伴奏として用いればほぼ調が確定するのではないかと考えた。また昨年度の研究では「おわり」から「はじめ」を転用したため，３番目の音を「ド」で第２小節目の同型反復にかなり無理をさせてしまったが，これも難なくクリアすることができた。

ところが旋律線で問題となったことは，ハ調の７音の音階での導音「シ」の扱いであった。

隣の音へ移行する順次進行がもっともきれいな旋律線を描く要件であるが，子どもたちは得てして分散和音的にかなりの跳躍をくり返す傾向があった。聴いて奇妙な感じがする曲の多くは，上行する「シ」がいったん「ド」へと解決せず，あちらこちらと浮遊したままであることがその原因であるように感じた。ハ調ではなくモード（旋法）のようになっていたのである。このことには後に修正を加え，上行するときの導音「シ」は必ず近いところで解決すること。ただし下行するときに表れる「シ」は必ずしも「ド」へ解決しないでよいことを伝えたことにより，改善が見られた。

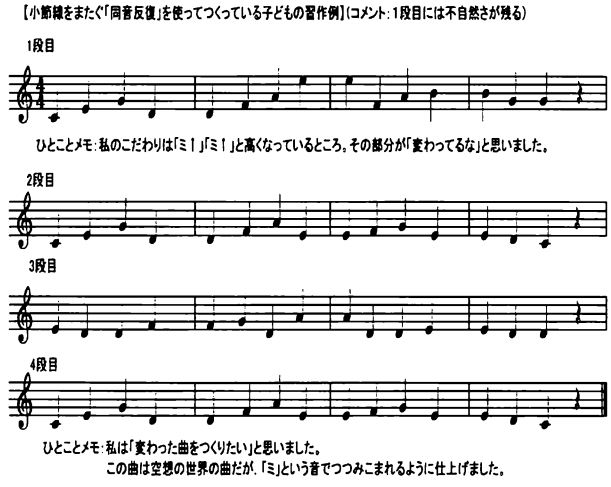
４．１．

右の「譜例１」に見られる子どもの班では，３人が同じ最初の４小節をつくろうと相談したのであるが，１人が同じ「はじめ～なか」を使いながら，まったく別のものをつくっていた。おそらく３人が大きな跳躍（第２小節目から第３小節目にかけて，高い「ミ」への１オクターヴ）音程を採用したところに違和感があったためであろう。しかしこの３人も第２フレーズ以下での旋律づくりにおいては，跳躍をやめできるだけ近くの音への進行を考えていた。また「『ミ』という音でつつみこまれるように仕上げました」と自分なりの考えを「ひとことメモ」にきちんと書けている。

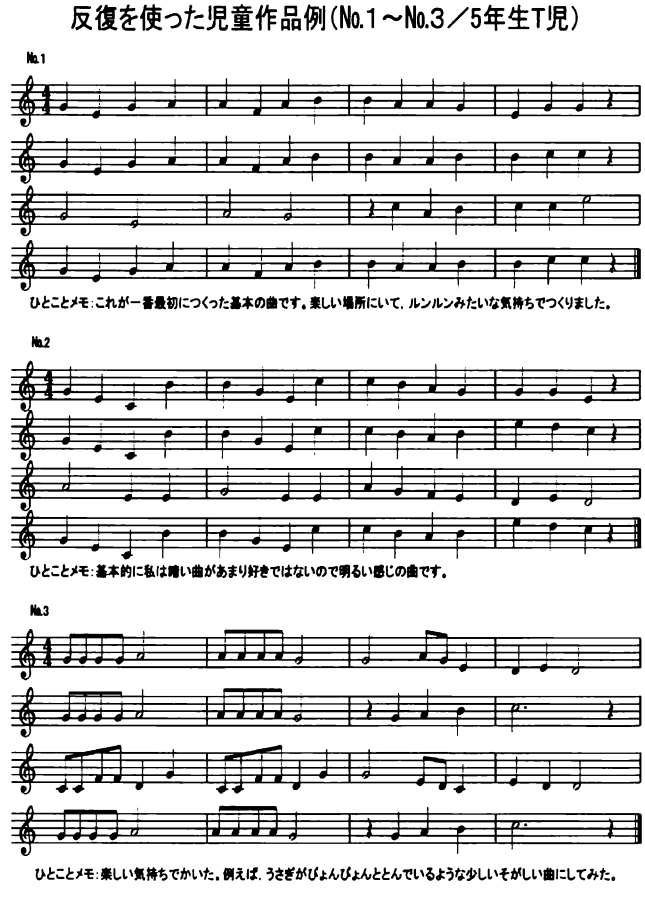
協同的な学習の結果，お互いに影響し合うと同時に音が求める動きにも意識を向けられたようである。

４．２．

次の「譜例２」に見られる子どもは，規定から発展の様子がよく見られる。まさしく習作から作品へと仕上げている好例でもある。「No.１」では１段目に２分音符や４分休符を使って変化を出そうとしているが，音の動き（進行）そのものはよく似ている。「No.２」では開始を「ソミド」でつくり「No.１」より自由度を増している。「No.３」では，リズムを自分で考えてはいるが，リズムパターンを反復すると同時に第１小節目と第２小節目を同音でつなぐが，音の進行は逆にするなど工夫の跡が見て取れる。また３段目には変化を工夫した跡が見て取れる。他の子どもたちに人気があった曲である。



【譜例１】



【譜例２】

５．成果と課題

本題材の授業中で愛唱曲「ジングルベル」（宮沢章二作詞／ピアポント作曲）を歌う機会があったが，「この曲の特徴は？」と尋ねたところ，即座に冒頭３小節間の反復・変化の様子，終止・半終止を含め４つのフレーズのそれぞれの形式的な関係を子どもなりの言葉で答えることができていた。このような意識付けを行ったあとの歌唱では，音の変化やフレーズの変化が手に取るようにわかるような味わい深い表現が聴かれた。音楽づくりの活動が旋律構造の確実な理解とともに表現に生かされた。

また，次の題材「詩と音楽を味わおう」で鑑賞教材「待ちぼうけ」（北原白秋作詞／山田耕筰作曲）を扱った際には，即座にこの曲が半終止（中国風の旋律としての特徴で終止が「続く」感じとなる）を見つけ出したばかりか，１～５番の間くり返される冒頭の歌詞「待ちぼうけ　待ちぼうけ」が「ミソソソ～　ミソソソ～」と同型反復（模倣）でつくられていることに気付き，「ミソソソ～　レファファファ～」と同型反復したり「ミソソソ・ミソソソ・」と２分音符を短くしたりと比較をすることから，１～５番の状況の変化によって歌われ方の違いがあることを味わって聴いていた。さらには２小節ごと３か所，冒頭に８分休符があり言葉のまとまりを構成していることや，最後２小節が全体のフレーズをまとめるように音型が対照的につくられていることなど，また，その所々で歌詞の内容に反応して強調や間の入れ方など歌われ方に工夫が凝らされていることを味わって聴いていた。

5.1. 成果

本研究の目的に照らした成果として，

①「なか」をつくる要件は，同型と同音反復を使って曲を始めた場合に「上行導音は主音を通過させる」ことが安定した調性を生むことが明らかになった。これまでの留意点「順次進行がもっともきれいな旋律線をつくる」「跳んだら戻る（跳躍したら抜かした音を補完する）」などに加えられる。

②第１作目は「決まり」を遵守させることで工夫が生まれ，第２作目以降の自由性に根拠があるものとなった。

③楽譜を用いた鑑賞の活動で，旋律線の動きやフレーズの比較によって曲に隠されているさまざまな工夫を見つけ出す力がついた。また，それらをもとに味わって曲を聴こうとする態度が見られた。

５．２．課題

今後の課題としては，旋律づくりの活動を５年生第１学期に行うことで，楽曲を構造的に捉えたり旋律の特徴を捉えたりする力が育ち，第２学期以降の鑑賞や表現の活動に資するところが大きいと考える。

さらに，これまで「反復」を使った旋律づくりのあり方を明らかにしてきたが，今後はさらに自由な旋律づくりに発展する可能性が大きい「問いと答え」を用いた旋律づくりのあり方を明らかにしていきたいと考える。

「問いと答え」による旋律づくりは，モーツァルトがしたように２小節ごとの「問いと答え」でまるで会話のように曲を延々とつくる自由さは魅力的である。「反復」を使った旋律づくりとも補完し合うものなので上学年（６年生）での扱いとしたい。

学習指導要領のＡ表現「音楽づくり」のイの事項に傾斜を着けての実践展開であったので，今後はアの事項との関連も十分に図っていきたいと考える。

参考文献

*1江田司 2010『紀要／第 34 集』和歌山大学教育学部附属小学校

*2 平成 23 年度～教科書「小学校の音楽5」（教育芸術社）指導書付録 DVD ソフト／製作:スズキ教育ソフト株式会社

*3デジタル用ワークシートはアノト方式デジタルペンで使われる。このペンはスウェーデンの Anoto AB 社が開発した。ペンに内蔵された小型カメラが専用紙に印刷された微細なドットパターンを撮影し用紙の種別やペンの軌跡を記録するものである。鉛筆をこのデジタルペンに持ち替えるだけで，記入と同時に文字や音符・記号などがデジタルデータ化して記録され，リアルタイムにパソコンへ送信される。また，パソコンとプロジェクターや電子黒板などに繋ぐことで，7つのグループの記録を7分割画面で同時一斉に映し出せ，教室全体への効率的な情報共有が可能となる。例えば，筆順を再現できるように，どのように旋律づくりを行っていったかその思考のプロセスを見ることまでできる。今回の題材では一貫して記譜や読譜が含まれることから，ICT機器の活用を積極的に行い学習の進捗状況についてきめこまかく見ていきたい。また，子ども同士の情報の共有化も図りたい。 具体的には，平成23年度の科学研究費補助金（奨励研究）によって，アノト式デジタルペン及び OpenNote の活用と協同的学習の導入によって，音楽のしくみを考えた旋律づくりを行っている。

*4和歌山大学教育学部附属小学校・平成22年度教育研究発表会『要項』及び当日資料『音楽科学習指導案』

佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校 2009『質の高い学びを創る授業改革への挑戦』東洋館出版社 p.158~166（江田）

*5江田司，2011.7/8 月号『小五教育技術』小学館

（音楽科：音楽の仕組みを生かした旋律づくり）

*6江田司，文部科学省 2011『初等教育資料』9 月号の特集Ⅱ新学習指導要領における指導のポイント事例２「鑑賞と関連づけた音楽づくりの授業」）